

再スタート2年目の“Fukuoka”、それぞれの挑戦

①MGCファイナルチャレンジ第1戦、パリ五輪への挑戦

●外国勢との勝負とパリ五輪切符獲得へ挑む＝細谷恭平（黒崎播磨）

昨年から新たな大会として再スタートした福岡国際マラソン。10月のMGC（マラソン・グランドチャンピオンシップ）で3枠のうち2人が決定したパリ五輪代表の、残り1枠が決まるMGCファイナルチャレンジの1つに指定されている。男子のMGCファイナルチャレンジは12月の福岡国際、2月の大阪、3月の東京。この3大会で2時間05分50秒以上のタイムで走った記録最上位選手が選ばれる。

日本人選手ただ1人の招待選手である細谷恭平（黒崎播磨）は、強豪外国勢と地元の福岡国際で勝負をするとともに、パリ五輪代表切符獲得を狙う。

●MGC前から福岡国際に出場を予定

細谷は10月15日のMGCで五輪代表権を狙ったが、28km手前で転倒し途中棄権した。予想外のことが起きてしまったが、“予定通り”に福岡国際マラソン参戦を決断した。

細谷はMGCから1カ月半の間隔で行われる福岡国際に出場を決めた経緯と、その目標を冷静に話した。

「もともと福岡に出るつもりでした。（今年3月の東京マラソンは日本人5位で）世界陸上代表になれませんでした。世界陸上とその1カ月半後のMGCに出る予定だったんです。MGCから福岡も同じ間隔です。マラソンは経験することで引き出しが増えます。MGCで五輪代表を決めていたとしても、福岡でパリに向けて経験を積むつもりでした」

細谷は一度、福岡国際を経験している。21年大会で日本人トップの2位。レース終盤に気温が上がったため記録は2時間08分16秒にとどまったが、30kmまでは日本記録も狙える1km2分58秒ペースで走っていた。

日本選手にとってはかなりのハイペースだった。どの選手も消耗が大きく、高温になったことで30km以降は大きくペースダウンした。ギザエ・マイケル（スズキ・ケニア）がタフさを発揮して優勝したが、細谷もペースダウンを最小限にとどめた。

今大会は21年大会より強豪選手が多く出場する。気象条件などはどうなるかわからないが、その時以上の“有益な経験”になる。細谷はそう考えて福岡国際参戦を決めた。

●自身初めて1カ月半の間隔で2つのマラソンに挑戦

MGCでの転倒は、後ろを走っている選手と脚が接触したことで起きた。レース中の転倒は初めてだったが、「体が浮いた」と感じ、次の瞬間に「地面に叩きつけられた」。痛みが激しくしばらく立ち上がることができなかった。こうした突発事故をなくすことはできない。接触した選手とその指導者からは丁寧な謝罪もあり、細谷は起きてしまったことは気にしていない。

もともと出場予定だったが、転倒後すぐに気持ちを福岡国際に向けられたわけではない。「（前レースの）東京マラソンで失敗した反省から、先頭の動きにその都度反応しないように走っていました。集団の後方で距離も少し開けていましたね。30kmが近くなって自分も動き出す準備をしていて、これから勝負だ、と思っていたところで起きた転倒です。そのときはMGCの戦いに集中していたので、すぐに福岡のことを考えるのは無理でした。やるせない気持ちが強かった」

MGCの夜は寝付けなかった。横向きの姿勢をとれば大きな痛みはなかったが、パリ五輪への道

をどう進めていくか、さまざまな選択肢が思い浮かんだ。そのうちの1つが福岡国際出場だったが、痛みがいつ完全に引くのかもわからない。

どうしたらいいのか気持ちの整理がつかなかったが、ひと晩考え続けて福岡国際に出場する意思を固めた。MGCの翌朝に澁谷明憲監督へ「どうしても（五輪代表切符を）福岡で取りたいです」と申し出た。

すぐに強度の高い練習を再開できたわけではない。11月3日の九州実業団駅伝は5区(13.0km)で区間4位。区間賞選手とは17秒差で、それほど悪かったわけではない。だが肩の痛みが少し残っていた。細谷の走りを見た澁谷監督は「痛々しかったし、走りにいつものキレがありませんでした」と話す。

しかし「MGCまではテンションが高い状態でした。駅伝もその状態で走ったら、その後が持たなかったかもしれません。福岡を考えたらよかった」と澁谷監督。それでも駅伝の3日後に行った40km走は、タイムが速くなりすぎた。1週間後の40km走は抑えて走ったという。

最善と思われるトレーニングに取り組んだが、1カ月半の間隔でマラソンを2本走るのは初めてのこと。想定外の転倒もあり、予定のスケジュールでは進められなかった。細谷も澁谷監督も、練習に手応えを感じられている、という言葉は発していない。初マラソン選手が目標記録を設定していても、その記録で走る手応えがあるとは言えないのと同じことだ。

しかし細谷は21年福岡国際の1カ月後に、ニューイヤー駅伝4区(当時22.4kmの最長区間)で区間賞の走りをした。細谷自身はマラソンから駅伝につなげる練習とは違い、「参考にならない」と言う。だが自分の状態を見極めて調整していく、という点で共通した何かがあるのではないか。

細谷は大会10日前の取材で「もういつものマラソンの調整の流れに乗っています」という説明の仕方をした。どのマラソンでも最後の2週間は同じメニューを行う。同じメニューだから走りに違いが生じたときは把握しやすいし、その後の練習で強弱を付けて調整していくことができる。

自身の状態を見極める力と調整能力が、今回のマラソン挑戦では重要となる。

●記録よりも勝負を意識することで

選手のタイプにもよるが、記録を意識しすぎると走りに力みが生じる選手も多い。通過タイムが予定と違って焦ったりするのだ。そうなるくらいなら最初からタイムよりも、集団の流れに乗ることや、勝負に集中する方が力を発揮しやすい。今大会の細谷も「外国人選手に挑戦して、勝てばファイナルチャレンジ設定記録に届く」という意識で走る。

今大会は世界陸上で2個の金メダルを取ったアベル・キルイ(ケニア)、2時間04分51秒のスピードを持つアベベネゲウォ・デゲファ(エチオピア)が優勝候補の双壁に挙げられる。ソンドレノールスタッド・モーエン(ノルウェー)も、17年の福岡国際に2時間05分48秒のヨーロッパ記録(当時)で優勝した。30km以降で2位を1分22秒も引き離れた強さは圧巻だった。

ギザエは21年大会で細谷に勝った選手だが、昨年の大会ではもう1人のスズキ選手のヴィンセント・ライモイ(ケニア)が2位、ギザエが3位、B・ロビンソン(オーストラリア)がナショナルレコードで4位、キルイが5位だった。

「福岡を経験している選手が多いのはありがたいこと」と細谷は歓迎している。「コースにも慣れてるし、良いタイムも持っている。そういう選手たちと競っていけば2時間5分台が出しやすくなる」

「(北九州市が拠点の黒崎播磨にとって)福岡は地元ですし、21年も沿道の応援が背中を押してくれました。MGC出場権を取った思い出の大会です。福岡でファイナルチャレンジ設定記録をクリアしたいですね」

高いレベルの挑戦をしたい細谷には、福岡国際が格好の舞台になる。細谷のパリ五輪出場には、“Fukuoka”が重要な役割を果たす。